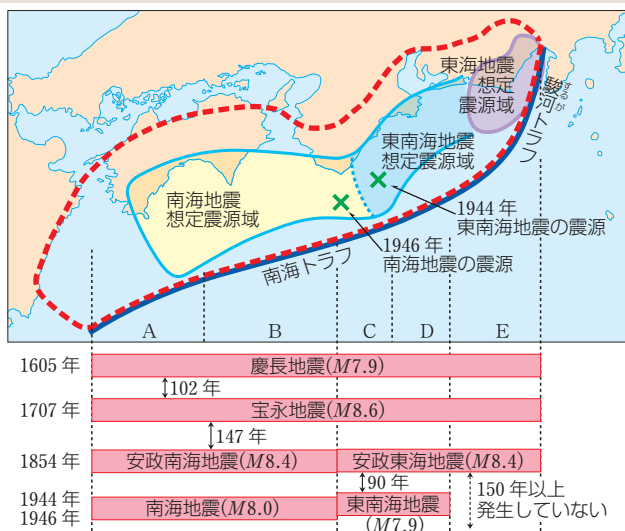


参考

南海トラフ沿いの巨大地震

東海から西の太平洋岸では、フィリピン海プレートの沈み込みに伴い、南海トラフに沿って海溝型の巨大地震がくり返し発生している。地震の際に歪みが解放される範囲を震源域というが、これまでに観測された南海トラフ沿いの震源域は下図のようにおおよそA～Eの5つに分けられる。1854年にはC、D、Eを震源域とした地震(安政東海地震)が発生し、その32時間後にA、Bを震源域とした地震(安政南海地震)が発生した。その後、1944年にはC、Dを震源域とした地震(東南海地震)が、その2年後にはA、Bを震源域とした地震(南海地震)が発生した。しかし、このときにはEの地域の歪みは解放されなかった。そのため、Eの地域を震源域とするマグニチュード8程度の地震(東海地震)が、近い将来に発生する可能性が高いと考えられている。

また、C、Dを震源域とする地震(東南海地震)、A、Bを震源域とする地震(南海地震)も近い将来に発生する可能性が高いと考えられており、どちらもマグニチュード8以上になると推定されている。A～Eまでの全領域を震源域とする、より大きな地震が起こる可能性も指摘されている。2011年の東北地方太平洋沖地震以降、国の地震・津波災害想定としては、最大クラスの地震・津波を検討すべきだとして、海溝沿いからより内陸まで、またより西部(日向灘付近)までを含む広域な震源域が採用されている(下図の赤色破線)。これらの地震は津波の発生を伴う可能性も高く、非常に大きな被害が出ると考えられるので、ハザードマップ(→p.216)を作成するなどして、十分な備えをしておく必要がある。



▲南海トラフ沿いの地震の発生時期と震源域